

## 和歌山・野田地区遺跡

- 1 所在地 和歌山県有田郡吉備町野田
- 2 調査期間 一九八〇年(昭55)五月～一九八一年(昭56)二月
- 3 発掘機関 和歌山県教育委員会・和歌山県文化財研究会
- 4 調査担当者 藤井保夫・渋谷高秀
- 5 遺跡の種類 寺院跡・水田跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 先土器時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

野田地区遺跡は、有田川下流域左岸の沖積平野と河岸段丘上に位置する。標高は約一三～一五mを測る。



(海南)

発掘調査は、海南・湯浅道路建設工事に伴い、日本道路公団より委託を受けて実施した。

検出した主な遺構は、段丘と沖積平野の境界部、沖積平野上に掘削された一〇条の溝群である。層位、流路を変え、流れを

有していた一〇条の溝群は、弥生時代後期後半から室町時代までの長期間にわたる。溝群の所属期間は、弥生時代後期後半～布留式期のものが三条、奈良時代後半～平安時代中期のものが三条、平安時代中期から室町時代に至るものが四条ある。溝群は、その位置、規模、堆積状況などより判断して、幹線としての機能を担って掘削された農業施設としての溝と想定される。沖積平野と河岸段丘によって構成される有田地方の、沖積平野を対象とした大規模な開発の表現である一〇条の溝群は、多岐にわたる問題を提起する。溝建設の背景を構成する、労働力編成、土木技術、用水管理、建設の主体者などの問題と共に、溝内出土遺物である土器類、木器類の編年の問題、また出土遺物が示す周辺遺跡群の特質などである。

奈良時代後半代から平安時代中期に属する三条の溝群からは、人形九点、木簡一点、木札一点など官衙的色彩の濃い遺物が出土する。

墨書のある位牌(1)・折敷(2)が出土したのは、標高一二・六mで検出した溝からである。溝は、幅二・五m、深さ〇・五mを測り、両肩には、径一五cm前後の丸杭を垂直に打ち込み、護岸している。溝内堆積土は、大きく二層に分かれる。下層は、灰色土と砂層の互層、上層は砂層と砂礫層の互層で、一四世紀を前後するとおもわれる遺物を含む。折敷は、下層の灰色土より、位牌は上層の砂層中より出土した。また六字名号を書写した八百点余りの笹塔婆は、上層の砂礫層上面で一括出土している。他に、完形の瓦器椀・曲物・漆塗皿

五点・箸・筴など多量に出土する。出土遺物は一般の集落跡などとは異なっており、寺院跡に関連するものが多い。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「

・ 「

(2) 「

111×28×22 061  
 133×281×3 061

9 関係文献

和歌山県教育委員会

『野田・藤並地区遺跡発掘調査概報』 一九八一年

(渋谷高秀)

和歌山・湯川<sup>ゆかわ</sup>神社境内遺跡

1 所在地 和歌山県御坊市湯川町小松原四三一

2 調査期間 一九八一年(昭56)七月～九月

3 発掘機関 御坊市遺跡調査会

4 調査担当者 巽 三郎・久貝 健

5 遺跡の種類 居館跡

6 遺跡の年代 鎌倉～戦国時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡は、標高六mの微高地に築かれた館跡で、敷地の周囲をめぐる幅約七～一mの堀を含めて東西約一三〇m、南北一八〇mの規模を有する。室町時代に有田・日高・牟婁郡一帯に勢力を有し、天正三年(一五八五年)豊臣秀吉の南征軍によって滅ぼされた豪族湯川氏が構えた館である。現在湯川神社が祀られている館の南東隅で堀跡の一部が残存



(御坊)

東隅で堀跡の一部が残存